
オニこんっっ！

Ne:TeL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オニこんつつつ！

【Nコード】

N5914I

【作者名】

Ne:TeL

【あらすじ】

ごく普通に高校生活を送っていた瀬々良木真希。しかし一人の美少女により、彼は日常から決別させられることとなる……。

笑いとか涙とか、色々あるかも！
たまにバトるよ！

学園オカルトアクションコメディ ？開幕！

プロローグ（前書き）

ところで『オニこんつつっ！』って一体何なんでしょう？

百之木夜胡

「ん？なんだ、そんな事も知らんのか。『オニがこんにちはつつっ！』の略に決まっているだろう」

違うと思います。

瀬々良木真希

「あ？今それどころじゃねえんだよ。……アイツどこ行きやがったんだ…百之木め…今日メシ当番だったのに」

さっきそこで見ましたけど…。

「本当か！？助かった！」

愛媛桃

「え？『オニこんつつっ！』？うーん…『オニコンプレックス』とかそんなんじゃない？意味わかんないけど。ていうか、真希知らない？用事あるのよね」

あ、さっきそこに

「ありがと！さあてどうしてくれようか…。まず左手小指第二関節をねじって…」

…教えて大丈夫だったんでしょ…。

結局なんだかよくわかりませんでしたね…まあ本編で明らかになる
事を祈りましょう…。

それでは本編へどうぞ！

プロローグ

拝啓、天国の父上&母上。

俺、瀬々良木真希《セセラギマキ》は、

死にそうでした。

何故過去形なのかというと、今は死にそうではないからです。

俺は先程、自転車からの襲撃を受けました。しかしそれを回避した

そのときに、自転車よりも大きな脅威に襲われたのです。

……自転車を避けた俺は、そのまま車道へとよろめき、現れた大型トラックに轢かれた……ハズでした。

目の前にトラックの生産元のロゴが見えたのをはつきりと覚えていません。

しかし、見えた次の瞬間には俺の身体は歩道にありました。

今でも状況が把握できていない俺の横を、変なモノを見るような目でジロジロと眺め回しながら帰宅途中、若しくは外出途中の人々が通り過ぎて行っています。

「見つけたわ…」

不意にそんな声空耳みたいな声が聞こえ、俺は確信しました。

俺は、

生かされたのです。

遙か昔、世の中には鬼というモノが存在していた。

鬼はヒトの心に付け込み、その心を喰らった。

鬼は輪廻転生し、滅びる事はなかった。

しかし、ある事件をきっかけに、鬼は世界から忽然と姿を消した。

それでも鬼は…きつとどこかに存在していることだろう。

「…って昨日テレビでやってたんだけど、どう思う？嘘クサくない？」隣で「ちやちや」と話している幼なじみに適当に、「あー」

と返事をする。

するとやはり彼女は気分を害したらしく、

「あー！聴いてないなあ？殴るよ？」

「聴いてる聴いてる。嘘クサイな、うん」

「ーか知るか。くだらねえ。と、瀬々良木真希《セセラギマキ》は思っていた。

今彼らは高校二年。そろそろ進路についても考えなければならぬ時期に、わけのわからない鬼の話なぞ聞いている場合か。時間の無駄だ。と、女みたいな名前だが一応男、瀬々良木真希は考えていた。

「もー朝だからブーツとしてるのは仕方ないけど、度が過ぎると捻るよ」

「ドコを!？」

「右足親指第一関節を」

「細けえな……」

ちなみにこの物騒な女は愛媛桃《エヒメモモ》。

一応、幼なじみの同級生、というやつだ。

今はこんな暴力的な桃だが、昔からこうだったかというところ……
こうだった。

真希は昔から桃がひたすらに怖かった。

その恐ろしさ故に桃は、『鬼の愛媛』と恐れられていたものだ。

そんなやつが今、鬼がどうのと話をしている。

奇妙なものだ。

「とうかが、今日から2学期なんだから、シャキツとしなよ!」
バシン!と背中を叩かれ…もとい殴られ、「うっ…」とむせる。

シャキツとしたいのはやまやまなのだが、真希は先日の方がどうしても気になっていた。

自分は確かに轢かれたはずだったのに、轢かれていなかった。

車道にすらいなかった。

そしてあの声…。

「わかんねえな…」

桃に聞こえないように呟く。

ただ一つわかるのは、おそらくあの声の主が自分を助けてくれたということだけだ。

「ねえちょっと、着いたけど」

桃が袖を引っ張ってきて我にかえた。

いつの間にか彼らの学校である『私立東風谷学園』に到着していたのだ。

「あたしちょっと先に行くけど…帰りまでにはシャキツとしてなさいよ?」

じゃあね、と手を振り桃は学園の中へ入っていった。

ちなみに真希は2年A組、桃はB組だ。

クラスが違うのが唯一の救いだ。

可愛い顔してホントに恐ろしいのだ、ヤツは。

「はあ……」

色々考えても仕方ない。

もしかしたら轢かれそうになったのも、あの声も、どちらも夢だったのかもしれないし。

というかその方が安心できる。

面倒事は御免だ。

真希は前を向いて歩き出した。

プロローグ（後書き）

どうも、Ne・TeLです。

ここまで読んで下さった皆さん、本当にありがとうございますっ！

このサイトで書くのは初めてなので、試行錯誤しながら書かせていただいています。

投稿は遅めになるかと思いますが、読んで下さる方々に感謝しつつ頑張りたいと思いますので、よろしくお願いします！

一 鬼目 転校生

久しぶりの学園。

だからといって特に何があるというわけでもなく…。

夏休みに入る前と同じように教室へ赴く。

時折知り合いが「久しぶり！」とか声をかけてくれるが、真希は「ああ」と片手をあげるだけでそっけない。

いや、これが彼の普通なのだ。

真希はあまり目立ったことをしないタイプで、友人と言える友人も少ない。

しかし嫌われているかというところではない。

むしろそのクールな態度とそこそこイケたフェイスに、彼を想う女子も少なくない。

しかし如何せんクールな為近づき難く、その想いを彼女らが伝えることはなかった。

真希は教室に入ると、真っ直ぐに自分の席に

「おー！マキ、久しぶりじゃん」

向かえなかった。

「……………」

無視して進もうにも、ガツシリ後ろ襟を捕まれていて進行不可能。

「四季、離せ。俺を解き放て」

「そいつは無理な相談だな…なぜなら夏休み中一回も遊んでくれなかったからだ！」

それは悪かったと思っっているが…真希にだって色々とあるのだ。

真希の家は両親がいないので、現在高1の妹、美姫《ミキ》と交代で家事をやっている。

そのため、遊ぶ暇などなかったのだ。

家事がない日は家の中でずっとゲームをしているし。

ああ暇がない暇がない。

ちなみに真希と美姫は血が繋がっていない。

真希の母親がこの世を去ってからすぐに、真希の父親がどこかから貰い受けたらしい。

真希も美姫も幼かったので全く覚えていないが。

それにしてもこの白樺四季《シラカバシキ》、力が強すぎる。

振りほどこうにも振りほどけない。

「まあ待ってって。実は今日転校生が来るらしいという情報を手にしてな」

「興味ない」

歩こうとする…が、やはり無理だ。

四季の腕はピクリとも動かない。

「ちよちよちよ！待ってって、まだ話の途中…」

その時、

キンコーンカーンコーン…。

ナイスなタイミングでチャイムが鳴った。

そしてそれと同時にガラツと勢い良く真希らの担任、頼れる親分が入ってきた。

「おらお前ら席に着けやー」

ダンツと教卓に出席簿らしきモノを打ち付けて、東雲皐月《シノノメサツキ》は夏休み前と変わらない少々けだる気な口調で呼びかける。

今だとばかりに四季を振り払い、真希は自分の席に着席。

四季も、諦めて自分の席に向かっていった。

「よし全員来てるな。…さて、まだ夏休み気分も抜けきってねえだろうが、始まってしまったもんは仕方ない。気合いでなんとかし

る」

さっちゃんも抜けきってないんじゃないのー？と誰かが余計なことを言う。

皐月は声のした方をキツと睨み、

「さっちゃんって呼ぶな！確かに抜けきってねえが…あたしはいいんだ！」

そりゃねえだろう。

ちよっとした職権乱用だ。

しかし相手は親分、誰も文句など言えはしない。

「あ、忘れてた。おい転校生、入っていいぞ」

その声が教室に響いたと同時に、ガラツと扉が開き、生徒の視線は転校生に集まった。

入ってきたのは、長い髪をふわふわにウェーブさせた少女だった。

その美しさ、可憐さに、男女問わず目を奪われた。

「どうした、美人すぎて声も出ねえか？っただらしねえ…ほら、自己紹介してくれ」

皐月に促され、少女は桜色の唇を動かした。

「百之木夜胡《モモノキヤコ》です。皆さん、どうぞよろしくお願
いします」

その透き通るような声に、生徒達は心さえ奪われた。

しかし…真希だけは違った。

「この…声は…」

自分の頭の中に響いて消えなかった、あの時自分を生かした…あの声だった。

聞き間違っはすがない。

あれだけあの声には悩まされたのだ。

その声の主が今、目の前にいる。

「席は…真希の隣が空いてるな」

あそこに座ってくれ、と言つ臯月にコクリと頷き従つ夜胡と名乗った少女。

いいなー真希。ずりいよなー。

そんなクラスメイト達の野次が飛ぶが、真希はそれどころではなかった。

動悸が高まる。呼吸が早まり、息苦しさを感じる。

少女は真希の隣に座って言った。

「よろしくお願ひしますね、瀬々良木くん」

ぞっとした。

誰も名字で呼んでいないのに、どうして…。

その後真希は一日中上の空で、まともになつたのは放課後のことだつた。

ピンポーン。

瀬々良木家のインターホンが鳴る。

時刻は夜中の11時半。真希も2階の自分の部屋でそろそろ寝ようかとしていた時だった。

「お兄ちゃん、なんか女の人 came たよー？」

まだ下のリビングにいたらしい美姫がよんでいる。

むくりと起き上がり、誰だよこんな時間に…とぶつぶつ言いながら階段を降りると、美姫がニヤニヤしながら、「彼女？」と聞いてきた。

いねえよ、と言って玄関に立っている人物を見た瞬間 四肢が凍りついたように動かなくなった。

「夜分遅くにごめんなさい、どうしても話したい事があって…」

百之木…夜胡だった。

「なんで…」

「あら、私と瀬々良木くんの仲じゃない。ここじゃ話しづらいから…行きましょ」

グイツと袖を引っ張られる。

嫌だ。

本能が警告する。

行くな…行くな行くな行くな行くなイクナイイクナイイクナイイクナイイクナイイクナ!

「…ね？」

夜胡の瞳が妖しく光る。

その瞳に魅入られたように、真希の体は意思とは関係なく動き出した。

「帰って来なくていいからねー」

若干嫉妬のようなモノが混じった美姫の声が遠ざかっていく。

本当に…帰れなくなるかもしれない。

夜胡は真希を引っ張りながらクスリと笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5914i/>

オニこんっっ！

2010年10月9日22時11分発行